

## 遠い日の出来事

— 軍事教員を殴打した事件 —

林 英 夫

かつて、九五年春の「立教」(二五三号)という雑誌に「立教に戦争が来た」と題した、やや過激な拙文が、のっている。当時、昭和十八年(一九四三)三月、つまり太平洋戦争の最中に立教大学で軍事教官(飯島大佐)の補佐役西沢中尉(特務士官)を旧体育館の空室によび出して学生が殴打したという事件である。この事件を知ったのは、殴打に加わった学生六人をよく知る運動部に所属する友人からであった。この六人の当時の顔を今でも思い出すことのできるほど、存在感のある男達であった。

しかし、私は本人の姓名をあげることや、当人たちから当時の状況を聞き出すことはしなかった。それは知られることをきらっているのではないかと思つて、姓名を口外することも避けていた。このため、事件を疑問視する人もあった。当時、軍服姿の軍人を学生が呼出し、さらに殴打するようなことは、理由を問わず反軍的行為とみられ、退学命令だけでなく特高か憲兵隊によるなんらかの処分が予測される時代であった。

だから友人からこの話を聞いた時は痛快感と同時に本当のことだろうかと思つたほどである。軍人が幅をきかし威張りちらしていた「時局下」の出来事であつたことを、まず諒解しておいていただきたい。

遠い日の出来事（林）

この勇氣にみちた学生たちは次の六人である。いずれも昭和十八年九月卒にあたる学年である。

一、飯田講一郎（故人・経済学科・体操部）

二、石井 忠裕（故人・旧姓戸田・経済学科・ボクシング部）

三、奥 猛（故人・経済学科・ボクシング部）

四、清本 訓利（商学科・体操部・武蔵野市在）

五、土田 裕治（経済学科・スキー部・札幌市在）

六、佐藤 樟彦（経済学科・ボクシング部・山口市在）

六人のうち三人は世を去っている。飯田の父君、飯田堯一は、立教大学の先生で個性に富んだ言説から教えられることが多かった。石井は予科時代の筆者の同級生で、戦後ひととき銀座で店を経営、後、大会社に転じた。華族家（松本藩主）に生まれ育ちのよさを感じさせる人柄であった。奥猛は第三期海軍予備学生として館山の砲術学校で訓練中に教官から修正（殴打されること・海軍用語）を受けても倒れず、教官の方がくたばったという伝説の持主でもあった。ボクシング選手として後述の佐藤と共によく知られた人物であった。

六人のうち三人はボクシング部員であるが、その中の佐藤樟彦から冒頭に記した拙稿に対して親切な書状を当時いただいた。その文章を引用しながら、事件の伝聞ではなく、事実を訂正、増補しておきたい（カッコ内筆者註）。以下カギカッコ内佐藤樟彦の文。「事件の原因は、四月（昭和十八年か）にチャペルで行われる行事の際、軍事教官に踊らされた連中が、立教のキリスト教的体質を変える為、ピラをまいて妨害しようとする計画がある事と、従来運動部の予算は、各部代表が討議して民主的に配分していたが、その年

から関係もない飯島軍事教官（配属将校）が口出しして、まず銃剣道部（昭和十五、六年頃創部したように思われるが、正式に運動部の一部として認められていなかったように推測される）が必要な予算を取り、残りを各部に分けると言い出した事。」と軍事教官呼出しの二つの理由を語っている。この二つの事に、「猛反発して体育館の空室に西沢軍事教官を呼び込み、前記の二計画を取り止める様飯島に進言することを迫り約束させた。」

また、この後、昭和一九年に入ってから、「立教大学新聞」に銃剣道部の「格段の予算獲得を批判した記事を見て、記事執筆者の処分を配属将校は三辺総長に申入れた」（「立教学院百年史」三七八頁）とあり、さらに、その後チャペルがみそぎの道場と化したことから理解できるように軍部・配属将校の横暴は、すさまじかった。

ところで話を前に戻すが、体育館で西沢中尉を殴打したのは、土田であったが、土田によると勢いでなぐってしまったという。殴打するために呼出したのではなかった。さらに体育館横の空地に銃剣道部代表の学生を呼出し、横暴をいまして「修正」した。

西沢中尉からこの報告をうけた飯島大佐は激怒し六人の「放校処分しろ、さもなくば、立教大学を憲兵隊で包囲させる、と言いつ出した。遠山学長は、放校の権限は私にあって、軍事教官は関係ないとはねつけ、結局春休み中の停学処分となった」という。なお、佐藤樟彦は、筆者の前掲稿では「当時の学生は皆軍隊に入るのを嫌がっていたように取れますが、私は、進んで予備学生として海軍航空隊に入り二年間を過ごしました」と云っている。つまり「国や家族を守るのが男の義務だと思っていましたから」とも記しているように反戦でも反軍でもない健全な普通の学生であった。だから、この事件は常識的にも二つの主張が

## 遠い日の出来事（林）

当時なお社会的な正当性を持っていたといえる。ただし文学部の学生の多くは反戦ではなく厭戦であったし、佐藤樟彦も好戦的ではなく運命としての覚悟であったと思う。

その後、土田は「二年間の教練停止、反軍思想のレッテルを貼られ十日に一回位の憲兵の来訪をうけ、教練不合格の上に内申書は昇禁兵（生涯二等兵）とされたので飛行予備学生十四期を受け合格したが、四月から七月にかけてパラチパスに罹り、聖ルカ病院隔離病棟に入院、入院五十日を過ぎた後、毎週やつてきた憲兵が、医師に早く退院させろ、さもないと徴兵忌避で処罰するぞと怒鳴り散らしたが、当時陸軍軍医中尉でもあった担当医は法定伝染病の保菌者を退院させてもいいと言う許可証でもあるならさせると云って追いつ返してくれました」（海軍飛行専修予備学生第十四期会北海道支部編「戦いは遠き日のこと」所収、土田裕治「北国からの放談」から抄出）と土田は語っている。土田は秋田の出身で父親は民政党の貴族院議員であったが、特高によつて週一回以上、見張られたから後難はあとまで続いた。軍事教練は、陸軍のもので海軍は全く関係ないという海軍に志願し、退院後、間もなく海軍飛行科予備学生として入隊したので、憲兵や配属将校からも解放された。土田は竹を割つたような気性の男であった。

この事件のあつた日から、半世紀余をへて、遠い日の思い出となった。おそらく軍事教練の教員を殴打した学生が居た例は、きわめて乏しいと思われる。近代史のひとつまとして残したい勇氣ある事件として伝えておきたい。

（文中敬称は、すべてはぶいた。この事件に関し、土田裕治・佐藤樟彦・清本訓利・小川斌の諸君からの聞取りと引用のごとく佐藤君の書状、土田君の文章によるところが多い。記して感謝したい）

（立教大学名誉教授）